「相中相高百年史」より
（昭和初期の相馬中学校　３）

３　不況下の学校

1929（昭４）年 10 月 24 日、ニューヨークのウォール街で突如、株式取引のパニックが起った。世界大恐慌の始まりである。第一次世界大戦で焼け野原になったヨーロッパ大陸を復興させるために、作れ作れの合い言葉で増産していた鉱工農の生産部門が、突然、余剰生産物に変ってしまった。

資本主義国は、物価の値下がりをおさえ、景気の回復を促進しようとして、農産物を大規模に破壊し、生産を削減し、また工業施設をとりこわした。

1933 年アメリカでは、全綿作面積の四分の一が熟した綿とともに掘り返され、500 万頭の豚が政府に買いあげられ、つぶされた。ブラジルでは、1933 年までに、2,200 万袋（世界年需要額の約２倍）のコーヒーが焼かれ、機関車の燃料にされ、道路工事の材料に使われ、海に投げ込まれた。またイギリスでは造船業、繊維工業において、生産施設が取り壊された。

（青木書店発行『現代日本の歴史』上）

アメリカがくしゃみすればヨーロッパが風を引き、日本は肺炎にかかるという笑い話が実際の現象として起こり、経済基盤の浅かった日本は、たちまち臨終寸前まで追い込まれてしまった。

特に農産物の暴落ぶりは、他の平均物価に比べて著しく、生糸の 1930（昭５）年以後の対米輸出は、前年の七億六千万円から四億円へ激減してしまった。農蚕県である福島県が、このような経済影響をまともに喰ったのはいうまでもなく、農山漁村を地盤にする「相中」の生徒の家計もたいへん厳しいものであった。

当時の県立中学校の授業料は四円二十銭、学友会費が五十銭、旅行積立金が五十銭、野外教練費が十銭で、合計五円三十銭が毎月の経費であった。その他教科書が一年間に約十四円、ゲートル、実習服、運動服、運動帽靴などの被服費が、学年によっても異なるがかなりの金額になったので、当時の米一俵約六円程度で、反当りの収穫量が四、五俵であったことを考えると、ゆとりが無いと中学校には入学できなかったのである。

現在のような兼業農家が少ない時代であるから、農業外収入を持たず、米作、養蚕の一本やりでは、不況の影響は本当に深刻であった。

……

県の財政は逼迫し、1930（昭５）年の予算は前年度比 15%減額され、教育予算の整理緊縮の対象として、師範学校給費制度の改正、女子師範学校学級整理、中等学校寄宿舎の整理、寄生虫駆除費の削減の四項目が挙げられた。（『県議会史』）

相馬中学の「図南寮」も、1902（明 35）年会舎以来 28 年の歴史を残し、この年（昭５）３月末日をもって閉舎されたのである。

……

引き続く経済不況の中で、本県中学校の学級数は、昭和５年度の 11 校 170 学級をピークとして、７年度には 160 学級に減少している。

また、実業教育振興の意見が高まる中で、従来の中学校、高等女学校優先の中等学校教育体制に対する批判が相次いだ。

事実、「中学校は出たけれど」という卒業者の浪人化、高等遊民化を非難する声は高く、花嫁修行の高等女学校も不評であった。

……

このような世の不況を克服するために、政府は抜本的な経済政策をとる必要があった。しかし、資源の乏しい日本が、国外市場で他国の製品を駆逐するためには、原材料を国外に仰ぐ分を、国内企業労働者の賃金を低く抑え、コストを低廉にしなければならない。

しかし、この政策は国内市場の購買力を増やすことにはならず、かえって各国より、ソーシャルダンピングの疑いをかけられてしまったのである。

女工哀史はこのような国策遂行の犠牲であった。輸出は延びず、国内不況は相変わらずで、日清、日露、第一次大戦と日の出の勢いで近代化の道を突き進んで来た大日本帝国も、とうとう厚い壁に前途を塞がれてしまったのである。

このような困難を打開するために、大日本帝国主義は、実に短絡的な解決策を見出した。宿命的な領土と資源の狭少を、大陸への進出でまかなおうとしたのである。他民族の領土を侵略し、主権を侵害することが人道上許され得べきことではないにもかかわらず、民主主義の底の浅い日本は、天皇の御印の下では全能であるかのような錯覚に陥っていたのである。

今にして思えば、昭和初期からすべてが狂っていたように思えるが、その当時においては、相次ぐ事変に多少の不安はあっても、祖国躍進の捨て石であろうと考えるのが自然であった。

（1月26日　選択転記　村山）